

「亀戸あたりで江戸城の瓦を造っていた」という話が残されている。それは本当なのか、調べてみようと思う。

意味のない口承はないと思う。ただ、伝言ゲームと同じで、長い年月を経て、当然、正確さは欠けてきていると思われるので、場所については範囲を広げて考えてみた方がいいかもしれない。時期も築城時とは限らない。築城後の増改築や修理など、職人が必要とされる機会は多々あったはずだ。

江戸城について検索をしている中で、朝日新聞デジタルが二〇一八年に発表したこんな記事を発見した。

**【海底に沈む、江戸城の瓦三〇〇年前の「遺跡」調査】**

<https://www.asahi.com/sp/articles/ASLDK427KLDKUTPB003.html>

記事によると、海底遺跡調査の結果、初島西岸沖水深二十メートルの海底から江戸城の瓦が見つかったという。大坂から江戸に向かう航海中に沈んだ

荷船の積み荷が、そのまま残っていたらしい。そしてその瓦は、江戸城の瓦を一手に造っていた大坂の寺島家製だということだ。

遺跡の専門家が調査した結果なので、これは素直に受け入れようと思う。江戸城は家康の死後、次の流れで二度解体され、築城しなおされている。

一六〇三年 家康築城開始

一六二三年 二代将軍秀忠 家康の天守解体後、新たな天守築城

一六三八年 三代将軍家光秀忠の天守解体後、新たな天守築城

記事に掲載された画像を見る限り、瓦は赤く錆びているので、銅瓦なのではないかと思う。白い天守にこだわった家康は、時間が経つと白っぽくなる鉛瓦を使用したとされている。そして家光の頃に足尾銅山から大量の銅が産

出できるようになり、それまでの鉛瓦をやめ銅瓦にしたと言われている。以上のことから、海底調査で見つかった瓦は家光の時代の銅瓦と断定してもいいように思う。それを大阪の寺島家が一手に造っていたというのなら、亀戸あたりで造られていたとされる瓦は、家康か秀忠の時代の鉛瓦ということなのだろうか。

寺島家のことを念頭に置きつつ、国立国会図書館のオンラインサービスを利用して、調査を進めていこうと思う。「江戸城 瓦 職人」のワードで検索してみると、かなりの本がヒットした。その中から、関連がありそうなものを並べてみる。

○飯塚新（安田火災海上防災課）による随筆（一九七〇）「そんぽ予防時報リスク情報専門誌」（八十三）十ページ 日本損害保険協会より

江戸の町づくりに貢献した瓦の供給地がどこであったのか、正確にはわからない。ただ、諸国産の瓦にたいし、地瓦とよばれる地場産の瓦が供給されたことはまちがいないし、その供給の中心地が隅田川兩岸にあったことも疑いない。

（略）

浅草より地瓦が長く、しかも多量に焼かれていたのは、むしろ本所一帯ではなかったかと思われる。そこは隅田川の東岸、いまは墨田区の一部である。瓦焼きの基盤をつくるのは良質な粘土である。本所から東方へ伸びる沖積地はこの条件によくかっていた。さらに瓦のような重量物を運搬

するには、水運に恵まれなくてはならない。この点でも下町は適していた。大小の河川、運河が、かつては縦横に通じていたからである。

隅田川東岸の粘土は瓦焼きに適していたという。東岸なら、亀戸側だ。しかし仮に隅田川東岸で焼いた瓦が江戸城に使われていたとして、「亀戸あたりで江戸城の瓦を造っていた」と言えるのかどうか。正直かなり無理があると思う。口承の根拠は、おそらく別にあるのではないだろうか。

○加藤晃一（一九八九） 江戸時代の瓦における江戸式の展開

「史学研究集録 第十四号」 五十八・五十九ページ 國學院大學日本史学専攻大学院会より

江戸の瓦の生産は、文献史料から得られる情報はきわめて限られ、不明な点が多い。瓦の生産に関連する史料としては、斎藤月岑の『武江年表』の正保二（一六四五）年の条に「江戸にて始めて瓦を焼く（寺嶋氏某氏、中氏彦六というもの、江戸瓦師の元祖という）」とみえる。しかし、この年代には疑問がみられ、これ以前の寛永十七（一六四〇）年三月に、浅草瓦焼屋敷から失火する記事がみられる（『寛永日記』）。また、上述の寺嶋（島）氏は、大坂、京都で御用瓦師を務めていた寺嶋家の一族のものと考えられ、『寺嶋家文書』によれば、すでに江戸初期には寺嶋三左衛門・老岐が江戸表派遣されていた（文献十）。この寺嶋家は、幕末まで史料で確認でき江戸での御用瓦師として活躍している。また、同文書から、江戸、大坂、京都から瓦が運ばれていたことが分かる。江戸初期において、寺嶋家

より江戸での瓦生産がすでに行われていたことはほぼ間違いない、正保二年まで、瓦の生産開始が下がるとは考え難い。

(略)

幕府による職人の統制が、元禄十二(一六九九)年に建築関係の職人を中心とする肝煎制度が設置され、瓦職人もこのなかに含まれている。職人の結束は、すでに御用達職人などの有力者を中心に会所、内仲間などの組織によって独自に進められていたらしく、この組織を幕府が利用したものと考えられている(文献四十三)。

御用達職人を中心に独自に職人の結束が進められていた。これがいつ頃から始まっていたかは定かではないが、この記述から、江戸の瓦職人たちが江戸城の御用瓦師だった寺島家から仕事をもらっていた可能性が出てきた。そ

して江戸瓦師の元祖、中氏彦六。著者加藤晃一の、中氏彦六が江戸瓦師の元祖であることへの疑いも含め、この後、調べてみようと思う。

○社会経済史研究所編（一九六六）「社会経済史研究所研究紀要

（三二）九ページ 社会経済史研究より

江戸城の大増築にかかったのは、十年に隠居して秀忠が將軍になった翌十一年から十二年にかけてであった。同時に桃山式の諸大名の屋敷も建てさせた。日本全国の建築コンクリールの形になったと想像されるが、資材と技術と労力は広く諸国から集められた。木材と石材や石灰の記録はあるが瓦に関しては不明である。城の建物は秘密を守るため組織化された割普請で、受持以外は一切わからぬような仕組で行われたので、瓦も各地から集められた他に、各地の技術で江戸付近で焼かれたものと思われる。



ここでは具体的に、秀忠が將軍になった翌年の江戸城の増改築について書かれている。そしてその瓦は、江戸付近で焼かれたものと思われるという。ここで一旦、整理のため、気になった部分をまとめておく。

●江戸の町づくりにおいて、隅田川が瓦の供給の中心地であった

●江戸瓦師の元祖、中氏彦六という存在

●御用達職人を中心に、職人の結束が独自に進められていた

●江戸城の増改築に、江戸付近で焼かれた瓦が使われていた

江戸瓦師の祖、中氏彦六とは一体どういう人物だったのか。調べるといくつか出てきた。中でも詳細に書かれたものを二点紹介する。

○井上安治 画（他）（一九八一）「色刷り明治東京名所絵」 百十八ページ  
ジ角川書店より

枕橋から業平橋にかけての南岸、中之郷瓦町（今の吾妻橋二、三丁目）も、北岸東寄りの小梅瓦町（向島一丁目）も、地名そのまま、瓦焼の本場であつた。

（略）

小梅中之郷八軒町（現吾妻橋三丁目）の、浅草寺の末寺延命寺（昭和初期青戸に移る）に瓦不動尊という有名な仏像が安置されていた。作者は江戸瓦師の祖といわれる中氏彦六である。先祖は朝鮮からの帰化人で、仏像

をつくるとさながら生けるがごとく精彩があつて、ふつうの仏師にはまねのできない妙技を揮つたという。

○沾涼纂輯「他」(一九七六)「江戸砂子」二百九十三ページ 東京堂出版より

不動尊 中ノ郷瓦師、中氏彦六作也。

此彦六は無双の名人にて、瓦を以仏像を作るに、其形相仏工の及ざる所をよくす。正保四年九月、高野山蓮華定院の住職盛立法印、所望によつて俱利迦羅不動の像を作る。かの寺の開山行勝上人は、俱梨迦羅明王の化現なれば、あまねく諸州におゐて仏工画師等に命じて其像をうつすに、終に心に叶はず、中氏が瓦を以作るを見て、はじめて望をとげたりと。感心のあまり件の旨趣を書彦六へあたふ。彼が家にありて珍とせり。此もの、む

かしは今の椎の木やしきの地に住すと也。東都瓦師の始は、寺嶋氏と此彦六なりと云り。

中氏彦六の瓦焼の腕は、相当なものだったようだ。人物が見えてきたところで、次は文中に何度か出てきた中ノ郷について調べてみる。

○矢田挿雲（一九八一） 「江戸から東京へ 第五卷」 二百六十二―二百六十三ページ 中央公論社より

中之郷瓦町の瓦焼の絵は、昔から隅田川畔の景情を描く、浮世絵師の見のがさぬところであった。昔は南本所瓦町と称し、南本所石原町に連接してあったが、寛文九年、本所奉行からのお達しで、館林侯お下屋敷の付近で、火を用うるは然るべからずといわれ源森川の南岸へ移転した。瓦焼の

移転は、例のお椀を伏せたような、曲竈から崩してかかるので、大変だった。



『江戸名所図会 7巻』より「瓦師」

○東京都江東区（一九五七）「江東区史全」三一〇ページ 江東区より

本所瓦町は、はじめ本所村石原町続きの館林家の倉屋敷の近くで付近の住民が瓦製造業を営んでいたが、寛文年間（一六六一〜一六七三）たびたび失火をしたので小梅村続き源森橋東に移ったが元禄七年（一六九四）にここあたり一帯が水戸邸になったので深川北松代町の近くへ代地を与えられ南本所瓦町と町名を定めた。

瓦職人たちが源森川南岸に移ったのは、寛文九年とある。寛文九年は西暦一六六九年だから、明暦の大火（一六五七年）より後だ。残念ながら、その頃にはもう天守は消失している。彼らが江戸城に関わったとすれば、本所村石原町続きの館林家の倉屋敷近くで瓦製造業を営んでいた頃しかない。

そうなるとわからなくなるのが、江戸瓦師の元祖とされる中氏彦六の存在である。中氏彦六が江戸瓦師の元祖なら、石原町付近で瓦を焼いていた住民はどうなるのだろうか。中氏彦六が江戸瓦師の元祖というからには、彼らより前に瓦を焼いていたはずだが、検索で出てくるのは、「中之郷の中氏彦六」と書かれたものばかりだ。源森川南岸の中之郷で瓦焼が始まるのは、石原町からの移転後である。

中氏彦六の元祖説は、先に引用した「江戸時代の瓦における江戸式の展開」の中で、加藤晃一氏が疑っていた。私も別のアプローチから、中氏彦六

は江戸瓦師の元祖ではないという結論に至った。もともと石原かどこかで瓦を焼いていて、中之郷にいた頃に仏像で有名になり、中之郷の中氏彦六と言われるようになっただけかもしれないが、中之郷以前の情報が出てこない以上、元祖と言い切ることはできない。





『本所猿江亀戸村辺絵図』 嘉永4年（部分）  
近吾堂より

瓦製造業を営んでいた住民  
たちは、南本所石原町続きの南  
本所村から源森橋の東に移り、  
その後再び、深川北松代町の近  
くに代地を与えられて移動す  
る。そこが南本所瓦町となつ  
た。

南本所瓦町の現町名は、亀戸  
一丁目である。

江戸城の瓦を一手に造っていたとされる大阪の寺島家が、江戸の瓦職人たちに仕事をふっていた可能性は高い。そして、その地は隅田川東岸であった可能性が高い。

しかし瓦職人たちが亀戸にやってきたのは天守消失後なので、残念ながら、亀戸で江戸城の瓦を焼いていたという事実はなさそうだ。しかし現実として、亀戸あたりで江戸城の瓦を造っていたという話が、口承として残っている。ここが伝言ゲームの面白いところだ。

ここから先は推測でしかないが、やはり館林家の倉屋敷近くで瓦製造業を営んでいたとされる住民が、江戸城に関わったのではないかと思う。その後、源森橋東を経て、南本所瓦町、つまり現在の亀戸一丁目五ノ橋付近にやってきた。そこが最終の地となり、先祖代々、江戸城の瓦を焼いたことを

誇りに思い語り継いできた。それがだんだん脚色されて「亀戸あたりで江戸城の瓦を造っていた」と変化していったのではないだろうか。

実際に五ノ橋付近で瓦を焼いていた瓦師の孫が、「薨の夢―或る瓦職の技と心 建築職人の世界」の中で当時の様子を語っている。祖父の代まで瓦焼きをしていたことや、五ノ橋周辺を五ツ目と呼んでいたこと、船便の利のため、五ツ目の川っぷちに窯元が多かったことなどが、一九二〇年生まれの亀戸一丁目住民の生の声として残されている。

江戸城とのつながりについては語られていないものの、亀戸一丁目に瓦職人が暮らしていたことがわかる貴重な史料である。

○加藤亀太郎（一九九二）「葺の夢―或る瓦職の技と心 建築職人の世界」  
六〇八ページ 建築資料研究社より

わたしの生まれは、亀戸の五ツ目って所（現、東京都江東区亀戸一丁目）  
なんですが、その辺りは、瓦焼きの窯元や瓦葺きの職人たちが大勢住んで  
る職人町だったんです。

たてかわ五ツ目って言い方はね、戦前の本所（墨田区）と深川（江東  
区）の間を流れて隅田川に注ぐ竪川に、一の橋からはじまって六の橋まで架  
かっていて、それぞれの橋の周辺を一ツ目、二ツ目、三ツ目っていう具合  
によんだんですね。それで五の橋周辺は五ツ目っていうわけです。

（略）

正式の地名はあるんですが、皆そういう言い方をしたんですね。

豎川の五の橋近くで、横十間川がぶつかります。この横十間川の川岸に瓦の窯元が六軒ありました。その頃の正式な地名は南本所瓦町っていうんですが、五ツ目の瓦屋、これでも通っていました。窯元が六軒もあったもんだから、自然、瓦焼き職人や瓦葺きの職人が集まってきて、職人町になっていったんでしょね。

いずれにしても瓦の窯元っていうのは、船便の利のために運河岸に作られるものでした。

江戸時代から続いている窯元や瓦職人の町といえば、勝海舟の物語なんかにも出てくる本所の横川町(墨田区)が有名なんだけど、五ツ目や浅草の言問橋の川つぶち辺りは、横川まであんまり距離がないでしょ。だから製造のほうも葺くほうも随分といたんです。あとから問屋になったところが多いですけどね。

ウチは、ジイさんが瓦作りの職人で、親父の代から葺くほうになったんですけれど、だいたい東京では関東大震災まで、瓦を焼いてました。

(略)

職人の家なんかには、家系図なんてありませんし、親戚にも何人も瓦屋がいたから、実際わたしの家が何代続いている瓦屋と言っているかわかんないけど、一応ジイさんから数えてわたしで三代目。それで倅も瓦屋です。

その倅、四代目加藤史郎氏が経営する加藤瓦店のホームページがこちらだ。

<http://katoukawara.o.oo7.jp>

現在は江戸川区西一之江に移転してしまっているが、  
亀戸発祥の瓦店として、その歴史は今も受け継がれている。

二〇二三年二月一六日

船橋屋歴史研究会 仲野実紀